

戦争災害研究室だより

第17号 2010年1月20日

東京大空襲・戦災資料センター

136-0073江東区北砂1-5-4 財団法人政治経済研究所内tel03-5857-5631 fax03-5683-3326

HP <http://www.tokyo-sensai.net/>

第17回研究会報告

日時 2008年5月24日(土) 14:00-17:00

場所 財団法人政治経済研究所 共同研究室

報告題 敗戦直前期における厭戦感の地方への拡大—人員疎開の検討を通じて

報告者 高橋未沙

出席者 青木哲夫 上野勝也 植野真澄 梶慶一郎 北浦康孝 黒田康弘 畠田修 高橋未沙
土岐島雄 山辺昌彦 山本唯人 吉田裕

報告要旨

1. はじめに—問題提起と修士論文概要

本報告は2007年度に執筆した修士論文の一部を使用しての報告である。国民の戦争体験を検討する際、「空襲体験」は最重要視されている項目である。しかし、日本全土に均等に空襲が行われたのではなく、敗戦まで一度も空襲を体験しなかった国民も多数存在する。しかし、先行研究においては空襲の「直接体験」が重要視されるあまり、空襲未体験者が分析に組み込まれてこなかったのが実情ではないだろうか。このような問題意識から、修士論文では、国民の厭戦感に対する空襲の影響を分析するとともに、本来局地的な体験であった空襲体験情報がどのような経路で都市部から地方へと伝達されていったのかを考察した。第1章では、官憲の調査資料と東京、大阪、長野におけるGHQによる面接記録の分析から、国民の厭戦感に影響を与えたのは空襲の「直接体験」ではなく、本土空襲によって「戦場に出ない自分でも戦争によって命を落とす危険がある」という戦争形態の認識そのものの変化があったことを明らかにした。続く第2章では空襲情報の「公の情報伝達経路」の一例として空襲報道の紙面分析を行った。空襲関係報道に対する統制を概観し、何を書くことが奨励され何を書くことが禁じられたのかを明らかにするとともに、その統制の成果は実際の紙面にどのように現れたのかを検討した。さらに、新聞社への情報伝達経路や大本営発表の形態を分析することによって、新聞紙面が作成されるまでの経過を追った。本報告で取り上げる第3章では、空襲による死傷者数、被害程度が新聞紙面に掲載されていなかったことを踏まえ、地方の空襲未体験者がどのような方法で空襲の実態を知るに至ったのかを考察した。ここでは一例として都市部への空襲により焼け出された人々が地方へと疎開したことが、空襲体験を持つ地域のみならず空襲体験を持たない地域にまでも空襲の実態を「体験談」として流布することになったことを明らかにし、ひいては空襲体験を持たない人々の戦争形態認識の変化を導いたことを考察した。

2. 報告要旨

本報告で検討を加えるのは、主に東京大空襲後に行われた罹災者集団疎開である。罹災者集団疎開は政府が初めて「強制に近き推奨」によって、成人を集団で地方に転出させた事例であり、一度に多

数の人口移動があったことを考えれば、学童集団疎開と同様に重要な意味を持つものと考えられる。しかし、先行研究ではそうした疎開があったことは指摘されているものの、その実態についてはほとんど言及されていない。

そこで、罹災者集団疎開の実施過程、疎開先における疎開者の受け入れ体制・地元住民と疎開者の交流の分析を通じて、疎開者の移住以前には局地的であったと考えられる戦争形態の変化の認識が、疎開者が地元住民とかかわりを持つことによって地方へと拡大していく過程を追い、戦時期における国民の戦争認識の変遷過程の一考察を行った。

討論概要

(参加者) 人員疎開についての研究は言われているほどなくて、飯田美季子さんの論文や青木さんが書かれたものがあるくらい。特に空襲後の集団的な人員疎開や、それによる空襲の情報の伝達や厭戦感の問題にかなり興味を持って触れられていた。

(参加者) 罹災者集団疎開の人数については、県レベルくらいまでは出ているが、その下の町村レベルのことは解るか。割り当ての予定は結構いろんな所で出ているけれども、実際にどの町村に何人というのは解らない。

(参加者) 私の調布の隣の府中で、教育関係の研究をしている方からガリ版の資料のコピーをもらった。年度は忘れたが、その村の毎月の疎開者のデータを1年くらい持っている。

(参加者) それはたぶん、人員疎開全部でしょう。それは時々ある。3月10日以後の罹災者集団疎開の数はあるか。

(報告者) 私も探したが、正確な数字は見つけることができなかった。信濃毎日新聞の記事の中で、何市に何人くらいの予定という数は見た。実際に入ってきた人の数は、見つけることができない。

(参加者) 県レベルではあったどうか。私は見ていないと思う。もっと前の、一般の受け入れをやっているのもあるし、あと、罹災者のも、福島県のいくつかの町にはある。ただし、どうもそれは、人口に比例して割り振ったのではないかと疑いを持つ数字で、調べた数でない可能性がある。ちゃんと調べたわけではなく、手近な所で見ただけだが。

(参加者) 改造戸数の表の見方を聞きたい。改造予定戸数と改造申請既認可戸数があって、その差が供出予定戸数になるのか。

(報告者) そうです。

(参加者) 供出予定というのは。

(報告者) 一番上の改造予定戸数が、各市町村に割り振られた、これだけの戸数を、改造しなさいという基準の数。その下の改造申請既認可戸数が、2月28日現在で、既に改造が許可されたもので、その下の数はその目標に向けて、あと何戸かを示している。

(参加者) これが認可されたら、補助金か何か出るのか。

(報告者) 補助金の規定は、私が見ている中ではなかった。改めて調べてみたい。

(参加者) 罹災者集団疎開の計画は、大空襲前の人員疎開計画の中にあるのか、それとも大空襲の後に初めて出てくるのか。

(報告者) 見た限りでは、集団で疎開をさせることは、成人では記載が見られない。個人個人の縁故疎開は、推奨して送り出したというのはいくつも見られた。罹災者集団疎開は、焼け出された人を、とにかくすぐ避難させる、地方に送り出すことで、かなり急ピッチに、空襲に遭ってから出てきた考え方だと思う。

(参加者) 疎開先で、疎開者に対して、生活資金などを提供することはあったのか。疎開者は生活費がないことが考えられる。そういう人たちに、何らかのルートでお金が出るケースはあったのか。

(報告者) 詳しく調べたことはないが、読んでいた史料の中で、保険金が出たので、その保険金を持って疎開してきた人たちで、かなりお金を持っていた人もいたという記事は見たことがある。ただそれが国からのお金かどうかは分からない。

(参加者) 制度的には、給付の制度がある。

(参加者) 赤沢史朗さんの研究がある。また、戦災資料センター3階の展示で、福島県で申請して時の書類がある。それは戦時災害保護法のもので、疎開先で申請して、疎開先でお金がもらえるというケース。それがどれくらいあるのか。現状を見ている限りでは、あまり出てこない。

(報告者) 新聞記事の中で、転居証明などをここに、今すぐ持ってきてほしいという記事は、入ってき

た頃から出ている。「届けをしなさい」と、かなり言われている。どれくらいの人が行ったかは、ちょっと分からなかった。まだ調査が足りない。

(参加者) 東京で空襲を受けても疎開先で申請できて、そこでもらえた。赤沢さんは「一定の補償となっていた」と書いている。

(参加者) それなりの額だった記憶はある。

厭戦気分とか疎開でよく使われる史料は、伊藤整などの都市にいる知識人とか、せいぜい労働者とか、そういう日記だと思うが、受け入れ側のそれに相当するような、農民とか、農村部の人の日記はないか。2例出ているのは、戦略爆撃調査団の面接記録からであるが、それ以外に出てこないか。

(報告者) 長野の県立歴史館に行った時に、聞いた限りでは、戦時中のそういうものは収蔵されていないとのことだった。手元にあるもので見た限りはない。自分が聞き取りなどに行けば、恐らく何人か日記を残している方はいると思う。

(参加者) 両方を見ないと、史料が偏る。大日方純夫さんが農民の日記を、ずっと使って研究している。

(参加者) 西田美昭さんの編集された新潟の農民の西山光一日記がある。『歴史学研究』で大門正克さんが、農民の日記の内容を整理されていると思う。

(参加者) 疎開者による空襲情報伝達の部分で、二つだけ挙げていが、他にもあるか。

(報告者) いくつか、実際自分が聞いた話と、新聞の記事が異なっていたというのはあったが、それは明らかに疎開者からと断定することができない内容だったので、割愛した。

(参加者) 疎開先での疎開者に対する具体的な施策で、今回は最大の問題が住宅問題となっていたと思うが、それ以外の問題には何があり、例えば長野では史料的にどんなことが把握できるか。

(報告者) 住居の他にも、就労の問題が大きかったことと、それから食糧の分配の問題に関しては、長野の史料はほとんど新聞記事の検索から行っていたので、県立の歴史館の史料は把握できていない。新聞記事などを見る限り、食糧を疎開者に分配する時に、争いとまでは書いていないが、問題が続発していることが出ている。修士論文で少しだけ書いたが、今回は割愛した内容に、就労したときの賃金の支払いの際に、お金ではなくて、農家で作業をして、物でもらわないと生活ができないので、問題になり、今回挙げた様に、カードで渡す方式にしたという例を見つけた。

(参加者) それも含めて、全体の中で住宅問題等を問いつけると、住宅問題の重要性も浮き彫りになるのでは。

(参加者) 『東京都戦災史』を読んで、3月10日の後の動き方を、時間を追って見ると、3月から6月ぐらいまで、ほとんど止まっている状態に近い。唯一、一貫してやり続けているのは、直ちに被災地から避難民を避難させることであるという印象があった。だから、大空襲後の対応を考える時に、避難が、最大の課題の一つだったと認識している。

大空襲になった時に、とにかく避難民を被災地から外へ出すという考え方が、どの時点から、どう出てくるのかを知りたい。1944年の3月ぐらいの段階から考えていたのか、それとも大空襲に直面していく中で考えたのか。

(報告者) 見た限りだと、空襲が本格化するまでは、避難より防空に主眼が置かれていた印象がある。都市の防空では、政府が都市部にいない方がいいと見ている人たちを、外に出したいというのは一貫してある。逆に、健康な人で防空ができる人は、とにかく都市に残ってもらった方がいいということも言われていた。私の理解では、疎開＝避難という認識があったのは、空襲後の段階の話になるのではないか。

学童疎開では子どもの命を守ることがあったと書かれている本を読んだことがある。成人の疎開に関しては、逃がすよりは、防空ができない人たちを都市ではなく、地方に移すという風に捉えられていた印象。人の命を守るという観念だとか、焼け出された人を何とか新しい場所で生活させるという意識は、3月10日の空襲で、大規模な戦災があったことによって生まれてきたのではないかと理解している。

(参加者) 二つ目になるが、なぜ出て行かなければいけないかという理由付けの部分で、朝日新聞の史料に、集団収容所が出ている。まず、集団収容所があって、そこにいる人たちから外に追い出す。

『東京都戦災誌』を見て驚いたのは、この集団収容所に収容した人たちに、食糧は3日くらいしか与えないと要綱に書いてある。現代の震災の避難所のように、みんな1か月、2か月いる中で、だんだんいなくなるというのではない。これは一時的なもので、一旦は収容するけれど、すぐに閉鎖するという発想だったと感じた。

それは早く避難というか、外に追い出すため、もしかしたら、もう少し居たい人や休養を取りたい人が居ても、外に出してしまいたいという意図が読み取れる気がした。そこまで、外に出してしまいたい理由はどこにあるのか。

(報告者) 言われた通りだと思う。とにかく、送り出した後も自分たちの力で生きてもらいたいとい

う意図が受け取れると思う。今なら、罹災した人の面倒は国や周りの人が見るのが普通の考え方だと思うが、史料を見る限り、地方に行ったらすぐに働いて、自分の力で生活をしてもらうことを前提にしていると思う。

いつまでも集団的に収容して、そこに避難されていても、先に進めない。国家として補償はできないので、生活の基盤を持てる、焼けていない場所で、縁故疎開でも集団疎開でも、とにかく都市からはなくなってもらいたいという考えでの集団疎開ではないか。あくまでこの史料からの印象だが。

(参加者) 結局、縁故のある人はいいが、ない人が地方に行くことは、費用を伴うし、国としてもそれを強制的にやらせるのには、何か理由付けをしないと、できにくいのではないかと思う。その部分の理由付けを、どのような言葉で言っているのかを、何か史料があれば聞いてみたい。

(報告者) ここに出ている通牒と、新聞記事で出ている「罹災者救護対策実施委員会」があったという事実までしか調べられていない。

(参加者) 私も使った、よく使われる民心調査で、都市におけるバラック生活者が何十万かいて、それを政府が気にしているのは、社会を支えているホワイトカラーとか自営業者とか、中小企業の工場主とか、そういう政府から見て健全な部分が悲惨な生活を続けていくと、民心が悪化し、革命が起きるような思想的危惧を書いている文章は見たことはある。空襲でパニックが起こっていることに触れた文章の中にあるので、秩序を支えてきた階層が、急速に没落して、バラックで生活していることをすごく気にしている。それに対する危惧があるように読めた。

戦時下の情報の伝達のルートで、疎開が非常に重要な意味を持つことはよく分かったが、他に全般的に考えて、人の移動がどうなっているかを聞きたい。第1次産業から第2次産業への移動など、それは全体として統計としてはあるが、具体的に都市から農村への、疎開以外に人の移動が見られるのか。疎開はその中の最大のものかも知れないが、他にもいくつかのパターンがあると思う。

(報告者) 帰農させる動きがあったことは本で読んだ。どの程度の人が帰農していたのか分からないが、それも都市部からの移動としては大きかったのではないかと思う。

(参加者) 『岩波講座 アジア・太平洋戦争』の黒川みどりさんの「都市と農村」では、家族の崩壊というか、疎開でいなくなったとか、兵隊に取られるとか、徴用で取られるとか、その背景にある人口の移動を強調していた。人そのものの都市から農村への移動への対応を調べる必要がある気がする。

あと、手紙はあなどれない気がしている。「通信検閲を通じて見たる民心の動向」という、手紙を検閲した史料があり、1943年か1944年で、食料不足とかそういうことが、民心にどういう影響を与えているかの研究がある。

それ以外に、松野誠也さんが防衛研究所で調べて、ようやく2束くらい、ほんの数百くらい手紙の検閲の史料を見つけており、小林英夫さんたちが中国で見つけた、関東軍憲兵隊の手紙の検閲の史料もあって、それらを見ると、ノモンハンで負けた話から始まって、戦時下の空襲も物不足も相当なことが書いてある。

それで、検閲のやり方が理解されてきて、最近、軍事郵便の研究が始まった。全てを抜き取り調査しているわけではなくて、ランダムに、左翼などの特定のマークしている人は、完全に検閲されていると思うが、普通の人の手紙を全部開けて見る余裕は、人員上もないと思うので、そうするとかなり手紙で、いろいろな話が伝わってしまうようにも読める。

戦地からの手紙でも、部隊から出せば上官が検閲するけれども、いろいろ抜け道があって、手紙宿という、兵舎の外に行きつけや知り合いを作って、そこに手紙を出してもらうこともやっている。そういう意味では、検閲の網からもれた手紙がかなりあり、それもあなどれないのではないかと思う。

『歴史評論』の特集で、ドイツは手紙の検閲の、びっくりするような数の手紙の史料が残っているらしいが、日本は100とか200くらいしかないような気がする。ここから見て、全体を論じるのは危険かもしれないが、残されたもので見る限りは、情報源としてかなり重要ではないか。防衛研究所以外はどこかにあるのか、まとまって出てこない限り、期待できないかも知れない。

(報告者) 確かに、人が移動しなくても情報を伝える手段はあると思うので、検討していく必要があると思う。

(参加者) さっき、帰農の話があったが、どれくらい行われたのか。話はあるが、その結果は分からないのか。

(報告者) 本では実態を伴った政策ではなかったと書かれていた。帰農が全く行われなかったのではなく、帰った人もいるということではないか。

(参加者) 開拓民みたいな話もある。

(参加者) 帰農は、少し遅れて出てくる。実態はあまり伴ってない。開高健の『ロビンソンの末裔』という小説で、焼け出された人を北海道に連れて行って、開拓させる話がある。そういう動きは史料にもあるし、新聞にも載っている。小説がどこまで本当かは分からない。小説によると、着いた途端に終戦になる。それでも開拓を始める。連れて行かれる前の話ではいくらでも土地があるといわれた

が、そんな土地があればとっくに開拓されているわけで、何にもないところをあてがわれて、四苦八苦する話。

開拓は八王子にもあったという。代が変わって当時の人は今はいない。開拓に行くと、ある時期までいた人たちがいるらしい。新聞に出ていた。

罹災して開拓した人がいたが、戦後海外から引き揚げて来た人たちが多く開拓に入ったので、引揚者に飲み込まれていったと思う。個々に行ったので、集団的ではないと思う。

結構途中から、大々的になるが、最初のは人員疎開とは理念的に違うものだが、その矛盾は気にせずに、帰農促進の方針を打ち出している。

(参加者) 軍需産業の地方分散化などの政策は中央レベルで、どの程度あって、どのくらい実現されたか。

(報告者) 長野に関しては、戦後の復興の時に「軍需産業が来たことによって、長野での復興がスムーズに進んだ」という記事を見たので、それなりの数の工場が入って、機能していたと思う。長野しか見たことがないので、他の地域の状況は分からない。工場疎開は、かなり積極的に行われていた印象がある。

(参加者) 個々の工場史や記録にはあるが、まとまった全体の記述や研究はあるかどうか。印象では工場疎開は結構やる。本格稼働する前に敗戦になって、それっきりという話が多い。東北地方などに結構ある。長野県では名古屋やその周辺の三菱の軍需工場が松本に移ってきている。時期は、空襲を受けてからではないか。

(参加者) 政策としては早い。実際には、最初の疎開の頃から、工場疎開も入れて考えている。実際に、中島飛行機は空襲があつてから、随時分散していった。

(参加者) 浅川とか、三多摩には中島の分散工場がかなりある。工場は定着しないで、引き揚げてしまう。

(参加者) 地下工場は当然、引き揚げる。大学に入ったものも帰る。

(参加者) 下請け工場の存在が前提になっているので、丸ごと移動できないから、移動しても工場相互間の通路が確保できないと難しい。

(参加者) 先程言われたように、戦後そのまま居着いた企業もある。

(参加者) 先程の帰農の話じゃないけれど、家の近くに同盟通信社の古野さんが牧場を1942年に開拓している。それが調布にある。その思想は、戦争もあるが、同盟農場の人たちの食糧の確保も、1つのテーマとして挙げていて、そこで農場だけでは絶対に生活はできない、牧畜をやらなくてはいけないというので、牛とかアヒルとかいろいろ集めてきて、実験農場みたいなことが、戦後まで続いた。今でも育成会という名前だけは残っている。だから、戦時中には同盟にとっては意味があつて、確保して、農地に開拓みたいな形で入ってきたということもある。

(参加者) 以前、未亡人のことを調べた時に、戦後の『主婦の友』など、手記を書く一般の人が、「疎開先でいじめられたけど頑張った」というような文章を書いていた。食糧配給をもらわないといけない時に、お手伝いをしなくてはいけないなど、苦労したというのが頻繁に出てくる。

都市に親戚がいる場合は戻れるが、それが戦災、空襲を受けてからか、受ける直前かに疎開して苦労して子どもを育てたという手記は探せばいっぱいある。戦後の総合雑誌の記述などは題材としては、たくさんあつた気がする。

その逆もあつたと思う。新参者の人たちが来て、供出しろといわれても、自分たちもいっぱいいっぱいなのに、着飾った人たちが来る。というような女性の手記は、探せばあると思う。こういうくくりで探すのは難しいかも知れないが、女性の奮闘記や手記で探す手段もあると思う。

それから、今回の報告では、人員疎開が最初は防空の観点から、空襲が始まってからは罹災者の避難という観点からというのがあつたと思う。都市のそういう人ではなくて、養老院とか社会福祉施設の疎開というのを考えていた。空襲の前か後か失念したが、東京の公立盲学校は塩原に移転する。明らかにそういう人たちが集められている施設の人たちが、空襲の前後に、どう扱われていたのかというのが、どういう意図で人を動かそうとしたのかの一つの傍証になるかという気がした。病院等は、もう避難などはなかったはずだが、どのくらいの人などが、記述があつたかどうかは、よく分からない。それが可能だったかを知りたいと思った。

(報告者) 飯田美季子さんの研究で、精神病院や身体の不自由な人の疎開に関しては、早い段階で交渉があつて、実際に移転させる措置があつたという記載があつた。それは東京大空襲よりかなり前の、1944年だった。

(参加者) 学童疎開ではなくて、障害者の学校が移転したのか。

(報告者) そうです。

(参加者) 東京にあつた盲学校の1つが、神奈川に移る。本当は神奈川に行けないのだけれども、いろいろ文書を出して交渉した。学童集団疎開が6月30日に決まって、8月頃からどんどん疎開に行

ったその後、移っていったと思う。都の公文書館に史料がある。

(参加者) こちらは、防空の観点から、もう早く行けということなのか。

(参加者) 肢体不自由児は、光明学校が置いて行かれる。そこで自分たちで見つけて、長野の上山田温泉に疎開した。なぜ上山田が空いていたのかはよく分からない。ギリギリで、学校が世田谷で空襲を受ける直前に行った。最終的には公の金が出るが、移転自体は学校の職員が行って、話して、受け入れられたので、実施している。

移動費用などは、公が持ったと思う。肢体不自由児とか精神障害児については難しい。政策的には、老人と子どもと妊産婦と病人は疎開させる対象だが、障害者、障害児は入らない。病者の中にも入らない。真っ先にしなければいけない筈だけれども、実際の手当は少ない。光明学校はまだ公立の国民学校だからよかったが、一般の施設は自力でやらないといけなかつたろう。

(参加者) 養護学校とか、建前としてはともかく実施だが、どこまでちゃんとお金を出してやったのかは、何とも言えないと感じた。

(報告者) 飯田さんの論文で、空襲の時に混乱が生じるおそれがあるので、養老院、精神病院、刑務所という施設を移転させておくということがある。ここでは、1944年の7月に、都がお金を出して、塩原に養育院の分院を開設したという例が挙がっている。

(参加者) 光明学校は有名。15年戦争と日本の医療研究会で、東大精神科の岡田さんが、1945年の精神病院における死亡率を、各病院毎に全部調べて出しているが、50何パーセントという異様な高率。すごく大きな問題がある。

厭戦感の問題でいうと、地域的には限定されているが、浜松、勝田、室蘭、釜石などの艦砲射撃を受けた地域は、空襲の比ではなくて、凄まじい。勝田の市史をまとめているときに大江志乃夫さんがよく言っていた。昔、手伝ったので覚えている。

敗戦は、8月15日ではなくて、艦砲射撃を受けた日だった。地域そのものが壊滅してしまう。それでかなり厭戦感が広がる。本当かどうか分からないけれども、稲垣さんの本だったかに、長野の方まで戦艦の主砲を発射する音がしたという記述もある。

(参加者) 艦砲射撃については、斎藤茂吉日記には撃たれた日と同じ日に砲声が聞こえたと書いてある。間違いだろうと思って、原稿も見たけれど、日にちも間違いはない。

(報告者) 厭戦感をどう捉えるべきか、情報から見るのか、別に見方があるのかななどを教えていただきたい。

(参加者) 上層部の人たちの情報源は、何となく分かっている、アメリカや連合国側の放送を傍受しているし、出先の外交官から、かなり正確な情報が来て、回覧されているので、天皇とかその側近や、近衛などが的確に認識できるだけの判断材料がどうもあつたようだ。

帝国議会レベルでも、秘密会で空襲を1回取り上げている。社民党の土井たか子が衆議院議長だった時に初めて公開した秘密会の議事録がある。秘密会は速記中止の決まりがあり、活字になったものだけしかない。かなりのことは上層部の中でも知れ渡っていたのではないか。

ラジオでは、短波放送の受信機は、持つことを禁止されているので、一般の庶民では聞けないが、やはり受信している人がいて、その人たちは英語の放送や日本語の対日放送を聞いている。サイパン島が陥落すると、アメリカ側が中波の放送を送ってきて、それを日本側が妨害電波を出して聞かせないようにするけれども、聞いている人がいる。山本品さんという、カストリ雑誌の研究をしている方の一代記が面白くて、自分の歴史に即して書いたものがある。彼は中学校の時に、ラジオを回していたら入ってきて、中波放送を聞いたと書いている。上のレベルでのいろんな情報源はそれなりに機能している面がある。

庶民のレベルの情報源の問題だと、確かに疎開した人の存在は大きいと思う。いくつか情報の流れがあつて、見取り図があつて、その中で重要なもの一つとして、疎開者がある。他の情報源は新聞など。それもほとんど研究がない。研究があるのは「流言」だが、資料集に収められているもの以外にはない。アジア歴史資料センターで「民心」などをキーワードに検索してみたが、今のところ出てこない。ただ、農村の側、受け入れた側の情報源は、調べたら面白いと思う。戦略爆撃調査団の調査以外に、もう少し何かありそう。

(参加者) 秘密会の議事録のコピーが戦災資料センターにある。3月の東京大空襲の直後に開かれ、かなり議論し、ヤジも飛んだりしていて、臨場感が溢れている。

(参加者) 厭戦感の問題は、空襲体験をもつ罹災者の人員疎開だけでなく、軍需工場に徴用工として動員されての厭戦感や、特攻兵士に取られた人々からの厭戦感もあると思うが、1937年を起点に1945年まで、時代的に、段階的に見たらどうなのか。

(報告者) 私も、それをずっと知りたいて思ってきた。厭戦感を何で測れるのか、人の感情をどうやって現代から見るのかを、ずっと考えている。見つけられた資料が、残っている流言の内容を記録した政府や軍部の資料しかない。その中で見ていくと、段階で捉えると、食糧がまず無くなってきたと

ここで、戦争はもう止めたいとか、食糧がないということに対する危機感があって、その後で、サイパンが陥落した、沖縄が負けたという年代別に見ていくと、徐々には高まってきている記述がある。その背景として、町の中のいろいろな出来事があると思うが、そこまでの史料を私は見つけることができているので、ごく一部の話ではある。

(参加者) 空襲の話は罹災者から聞くことで、田舎の人が新聞報道と違うと知って、実態と認識が変化し、それが厭戦感に繋がっていくというように一直線にいくものなのかと思う。

例えば、学童疎開した吉原幸子の日記を見ると、子どもたちは新聞記事が作られたものであることを認識していたのに、踏みとどまって厭戦感につながらない。最終的には繋がるのかも知れないが。空襲体験を聞くことによって、単純に厭戦感を持つのではなく、矛盾や葛藤があるわけで、これらを再構成して見る方法がないのか。受け入れる側は、疎開者を受け入れること自体で、厭戦感を持つのかも知れない。

(参加者) 空襲と食糧と、もう一つ重要だと感じたのは、赤沢さんや北河賢三さんたちが研究するように、闇屋と一緒に殷賑産業が闇に走り回っているのを見て、今言っていることは建前なのだという、厭戦に繋がる意識が出てきたことがある。役得とか、軍人の所に食糧がいっぱいあるとかいう、戦略爆撃調査団の言う「為政不平等」の意識の流れとどう関わるのかが気になる。

(報告者) それは、何の論文で書かれているのか。

(参加者) 岩波の『戦後改革』に、北河さんの「大日本帝国の解体とアジア 民衆にとっての敗戦」があるが、それに戦時下の民衆意識についての研究をまとめている。

新聞報道をずっと見ていて、大本営発表を見ると、かなり試行錯誤をされていて、有名なガダルカナル島の「転進」は、大本営発表が「撤退」を「転進」といってくるめた代表だけど、あれを見ると日本側の被害についてはかなり多い数を書いている、あれを普通人が読んだら「あれ？」と思うのではないか。マリアナ沖海戦も大決戦だと言いながら、フタを開けてみると、しょぼい戦果しか上がっていないことは、一目瞭然である。強制されているといっても、そこから気づいてくるものもあるのでないか。例えば清沢冽は日本側の発表を集計していくと、膨大な数になると書いている。そういう矛盾を感じ取っている人がいると思う。

ブレーデン決戦と聞いていたのが、知らない間にルソン決戦になっていたり、天王山が動いたとかいう話は聞く。統制の網の目からこぼれ落ちるものが、戦時下といえどもある。完全に画一化されたとは考えない方がいい。

(参加者) 疎開者の実態が違うのではないかと、本当に必要な人は半分ではないかとあるが、国民はこの当時、「もうダメだ」と思っていたと思う。1945年の3月頃の『週報』に国鉄服務規程が出ている。そこには国鉄の上司がでたらめな切符を使って乗っているの、それを厳しく取り締まれと出ている。1945年の春頃から、「もうダメだ」というのが『週報』を読むと出てくる。東京大空襲の『週報』は、これで江戸の人たちは家族も郷土もなくすことで、サバサバと戦えるという内容。『週報』を全部読み通すと、流れが解る。1945年になるとだいぶ変わってくる。

(参加者) 段階でもそうだが、主体によっても認識がすごく違うと思う。それが重要。現場にいる自治体のトップや末端の窓口の役人などの官僚たちが板挟みになって、空襲の度に矛盾を感じている。せめぎ合いの中で、そういう人たちの認識がどう変わって、どういう選択をしていくのかはポイントになる。上がいくら言ってきたとしても、現場に問題が山積していったら、仕組み自体を変えないといけないという時点がどこかで来るはず。全てが上意下達になっている状況では、下からそういう改革案を示せない。その状況の中で、どう振る舞うのか。そこに矛盾が凝縮されて現れてくる。そのレベルの変化が時間を追って追えたらすごく面白い。どの時点で「これはダメだ」という認識が出てくるのか。それが戦後の幕開けや助走の部分に繋がる。その切り替え点がどの辺にあるのかに興味を引かれる。

4月17日に「戦災者救恤振作の勅語」が出る。そこで1000万円を下賜して、「戦災援護会」を作り、そこが全国に事務所を置いて、職員を配置して、戦時災害保護法を実施するための事務をやっていく。それをやるにあたって勅語が出る。勅語に依拠して「戦災援護をやるために、お金も使わなくては行けないし、物資もそこに回さなければならない」という議論がされる。勅語の前と後で見ると、書類上の言葉などが変わっているのではないかと。お金が出るし、職員が配置されるので、現実的に援護の活動がそこから後におこなわれていくというのがあると思う。

(参加者) B29を見た経験は重要だと思う。地方でも上空を通るのを、かなりの人が見ている。かなり衝撃力を持っている。1万メートルの高空を飛んでいて、「わあきれいだ」というのが最初の印象みたいだが、それと都市空襲が結びつくと、アメリカの工業力を実感している。

大概見た人は「すごきれいだ」と言う。ぼかんと見ていたとそういう文脈でいつも出されるけれども、迫力があると思う。

(参加者) 意識としては、最後まで戦争に勝つと思っていた人が多かったのか。

(報告者) 私が読んだ限りでは「全く戦争を止めたいと思わなかった」という人がほとんど。ただこれはアメリカが取った史料なので、必ずしも本心かどうか解からない。かなりの人が「難しい」という認識を持っていたと思う。

(参加者) リアルタイムで聞くと、後で聞くのと答えはだいぶ違うかも知れない。

(参加者) みんな後で思うでしょう。パイロットが体当たりしたとか、そういえばあのときはそう思ったとか。これは絶対その時ではなく、後で考えたことだと思う。

(参加者) 大空襲を体験した人は、飛行機の音聞くと、B29を思い出すというトラウマがある。「厭戦」とか「戦争はいけない」とか、どこから思っていくのかを調べるとおもしろい。

自衛隊がイラクに8000人行っている。すでに16人自殺している。戦闘していないのに、自殺している。アメリカ軍もたくさん自殺している。PTSDも取り上げて、「やはり戦争はいけない」というものの考え方、精神をどうやって生み出すのか、考えて欲しい。

(参加者) 国府台病院という千葉にある陸軍の精神病専門の病院があって、そこで「都市空襲と戦争神経症」というレポートがある。それは、空襲が始まる前だったと思う。今、戦争神経症の史料が国府台病院から出てきて、研究が始まった。日本社会自体が鈍感で、PTSDの研究が全くないところから、ここ数年でここまで来た。

(参加者) 厭戦と関係があるか解からないが、史料を読んでいた中で面白いものがあった。最初の頃に空襲にあった人たちを、東京の郊外の、割と大きな家に入ってもらって、その人たちは一生懸命世話をしたけれども、避難してきた人たちは下町の人が多いから、戦争中、われわれは苦労して生活していたのに、こんな贅沢をしていたのかと、非常に反発感を持って、親切に对应しないで、物を壊したり取ったりするという形で対応した。それ以降は、小学校などに避難させたと言っている人がいた。自分たちばかりひどい目にあったことから、厭戦気分に近いものが出てきたと思った。

(報告者) それはどの史料で見たのですか。

(参加者) 戦略爆撃調査団の中の「日本タイムズ」の編集をしていた人かも知れない。

(参加者) 東京都の防衛局は疎開を人員疎開と物質疎開に区分している。政府側は幼児疎開とか、縁故疎開とか、工場疎開とか、疎開という用語を、組織上、法律上、行政上いろいろ使っているが、きちんとした定義があるのか解らない。戦後、何々疎開という言葉ができたのもあるのではないかと思う。疎開という言葉の用語体系がどうなっているのかと感じた。

東京でも、人員疎開から二つに分かれて、統制と指導という言葉がある。統制課がどういう統制をしたのか。政府なり行政は、満州移民なり満州開拓というようによく用語を変えるので、用語体系に興味を持っている。

厭戦感が「民心」とか「人心の動向」とか、情報伝達、情報学、心理学のような新しい分野の切り口がこれから出てくる印象を持った。

確か1944年の秋に、疎開政策が非常に上手くいったことで、文部大臣とか秘書官長とか関係者の大臣クラスの間が自分たちだけで金一封を山分けしている。

疎開は文部省や東京都の方が先に進めている。政府なり首相側は疎開を積極的にやる気はなく、やむを得ぬということで認めたところから、疎開の言葉自体も熟さなかったように思う。

イギリスの疎開を結構研究していた。イギリスの疎開は、子どものように弱い人からだんだん疎開をして、工場疎開になっていく。日本は逆で、まず工場疎開があって、一番最後に学童が行く。そんな順番になった。

軍需工場が疎開したときに、工場の人たちが付いて行く。そういう人たちは人員疎開に入るのか、工場疎開の方に入るのか、報告を聞きながら考えた。

私自身も、国民学校6年生の学童疎開で長野に行って、3月10日に東京の池袋に帰ってきたときに、ちょうど空襲があった。しかし池袋は山の手なので、下町の空襲にはあっていない。疎開先は志賀高原の温泉地の旅館で、旅館も中小の家族的ないい旅館に入って、6年生なので良くしてもらったので、学童疎開の悪いイメージはない。思い出もいいものなので、疎開のことは表立って言うことはできない。

(参加者) 疎開という言葉自体は、もともとは狭い意味での軍事用語で、突撃する時に密集隊形ではなくて、機関銃でなぎ倒されないように間隔を開けて突撃することだった。それがある段階で、日本語の概念になかった語彙を、実際の疎開という事態に迫られたときに変容したと思う。昔の軍事用語辞典で引くと、必ず疎開が出てくる。出だしは使い方がぎこちない。意味が解らない人が多かったのではないか。

(参加者) 都市計画と、都市疎開の両方ある。両方、間を開けるといような意味かと思えば、論者によって違う。もともとの都市疎開論は建物を少なくして道を拡張することだった。

(まとめ・文責石橋星志・山辺昌彦)